

序論、本論ときて、ようやく結論まできた。「梁川方式アクティブラーニング」とはいつてみたものの答えがあるわけではない。2学期も残り1週間となったこの時期に梁川高校の授業のあるべき姿について考えてみたいと思う。そして、3学期に何かできることはないかと模索してみたい。3学期は短いので何かやってみるにはよい期間である。始めてみたものの上手くいかなかったとしても、3月に時間切れがくるので何とかなる。

私は優れた高校国語教師を知っている。毎時間の板書計画をすべて取ってある教師がいる。板書した結果の写真ではない。板書計画である。毎時間入念な周到な準備をして授業に臨んでいたことがわかる。紙媒体でも取ってあるが、PDFでデータ化もしてある。教育センター時代に、この方の授業を生徒として受けたことがある。やっぱり違った。知的な高校の授業だった。こんな授業ならば毎時間受けてみたいと思うものだった。

また、教科書に載っている教材だけでなく、それに関連した教材をもってきて、生徒に比べさせながら授業をしている教師がいる。その先生は「こんな教材が生徒にいいと思うんです」と熱く語る。一つの教材を選ぶのに、どれほどの小説、評論、詩、古文、漢文などを読んでいるかわからない。多くの時間を費やし教材研究をしても、授業で使うのはその1割～3割ほどかもしれない。それが教材研究である。使わない7割～9割が無駄かというとしてそんなことはない。必ずその先生の肥やしとなっている。

もう一人の教師は、国語の授業のことをいつも楽しそうに話す。「生徒が～」という表情がにこやかなのである。こういう先生の授業は楽しく魅力あるものなのだろう。この先生は、授業構想のスタートを生徒においている。こんなことをやったらどうなるかと、いつも“しかけ”を用意している。たぶん本人からしたら失敗もあるはずである。しかし、生徒からすると失敗ではない。そして、本人にとっての失敗は必ず次に生きる。

梁川高校において授業を進める上での課題は、社会に出てもやっていけるだけの基礎学力の定着と高校の授業内容の理解の2つを同時に行わなければならないことだろう。これはなかなか骨の折れることである。だが、教師の腕の見せ所でもある。私は梁川高校の校長として、本校の先生方に前述の国語教師のようなことを求めているのではない。それよりも、今の授業をちょっと変えてみることはできないだろうかという提案をしたい。それぞれの先生方が、自分の授業を変えてみようとしただけで、それはものすごいエネルギーとなる。生徒への影響は計り知れない。

では、どこを切り口にするか。どこを突破口とするか。私は、50分のうち5分でいいから生徒に本気で考えさせたい。そして、考えことは話したり書いたりさせたい。問題は、生徒が本気で考えるような学習課題、テーマを設定できるかである。これは、ある程度トレーニングだと思う。今までやってこなかった教員にとってはハードルが高い。毎時間努力してきた教員は、どんどん質が上がっていく。生徒が考える価値のある課題、生徒が考えたい課題、生徒が他の人たちの考えも聞きたいような課題などである。

話す内容や書く内容は、その生徒なりのものでよい。回数や時間が増えていけば、自ずと向上していくはずである。多くの教師は、ここまでやらない。そして、生徒が話せない、書けないと嘆く。考え、書き、話す活動で15分とする。その他の35分は従来のスタイルでもかまわない。指導者にも授業進度などの都合がある。ただし、毎時間のようにアクティブな15分が確保されると、平凡な35分への生徒の取り組みが変わってくる。多くの教師は、そのことを知らない。

一応、結論が出たようである。この結論に「梁川方式アクティブラーニング」と名前を付けようと思ったが、結局特別なことではない。要はやり続けるかどうかである。教育に特効薬も万能薬もない。継続が、やがて力となる。